

## モネからリヒターへ —新蔵作品を中心に—

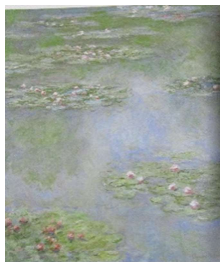
ポーラ美術館(箱根・仙石原) 2022.04.09~09.06

2002年に開館した「ポーラ美術館」は、開館以来創業家二代目「鈴木常司」が戦後40年をかけて収集したコレクションを公開し、これを基盤として様々な企画展を開催してきた。近年では、従来のコレクションに加えて、20世紀から現代までの美術の展開を跡付けるための重要な作品の収集を行っている。

本展は、「鈴木常司」が収集した19~20世紀の近代絵画が中心となるコレクションと、近年に収集した作品を合わせて紹介する初の企画である。

展示されている作品は、「光」を主要なテーマに、移ろう光を絵画に描き留めようとした「モネ」など印象派の画家達の作品から、光に強い関心を持つ「リヒター」や「杉本博司」、「ケリス・ウィン・エヴァンス」などの現代の作家たちの作品を一堂に紹介している。

また本展では、館内5つの展示室や2017年に新設された現代美術を展示するアトリウムに、ギャラリー、ロビー空間に加え、森の遊歩道も会場として作品を展示して、開館以来最大規模を誇る超大型の企画となっている。



クロード・モネ 《睡蓮》 1907年 油彩/カンヴァス 左

「モネ」は睡蓮の連作を長期間にわたり描き続けた。何故、こうも同じモチーフを描き続けたのか。植物としての睡蓮は、形体も色彩もそれほど複雑なものではないが、睡蓮の花や葉以外に描いても、「描いても描き尽くせない何か」が「睡蓮のシリーズ」にあったと考えることもできる。それは何かという一つの可能性として「水の存在」を挙げたいとされている。

ベルト・モリゾ 《ベランダにて》 1884年 油彩/カンヴァス 中

フランス印象派の画伯が、パリ郊外セーヌ河沿いのブーヅヴァルの夏で制作した作品で、陽光に溢れる邸宅のサンルームで、机に向かい花らしきものを手にしている一人娘の姿が、明るく柔らかな色彩と素早い筆致で描かれている。

グルハルト・リヒター 《抽象絵画》 1987年 油彩/カンヴァス 右

30億円の高額で落札をした作品が初公開されることで注目されている。